熊本国際建築展 くまもとアートポリス'96

泉
むらづくり展

IZUMI VILLAGEPLANNING EXHIBITION

KUMAMOTO
INTERNATIONAL
EXHIBITION
OF
ARCHITECTURE
KUMAMOTO
ARTPOLIS '96

K·A·P

CONTENTS

泉

KUMAMOTO INTERNATIONAL EXHIBITION OF ARCHITECTURE

KUMAMOTO ARTPOLIS '96

泉むらづくり展概要……1

プログラム……2

棟上げシンポジウム……3

◆講演「交流を通した村づくり」……4

講師：斎藤章一　国土庁審議官

◆パネルディスカッション「泉村の価値を語る」……12

初秋の平家伝説の里めぐりツアー……29

海と山を結ぶ物産展示即売会……35

概要

九州山地の自然に抱かれ、平家落人伝説が息づく静かな山村、泉村。ここには歴史的な遺産や四季折々の自然を目当てに毎年、県内外からたくさんの人が訪れている。しかし、自然景観だけを売ってきた観光にも陰りが見えはじめ、これから村を支えていくためには、新しい起爆剤が必要だと思案されていた。

そのような中、平成9年4月、観光客との交流のための施設「ふれあいセンターいずみ」が村民の期待を受けて誕生する。村の表玄関とも言えるこの建物はアートポリス参加作品であり、観光拠点として村活性化への大きな可能性を秘めている。

今回のむらづくり展では、センターの棟上げを記念するシンポジウムをはじめ、物産販売、五家荘を巡るミニツアーなど、様々なイベントが開催された。「泉村にしかない宝ものとは何だろう」「わが村の宝を捜し出し、自分たちの手で育て次の世代へつないでいこう。」これから山の文化を担っていく村民の自信と誇りを喚起させるイベントとなった。

●棟上げシンポジウム

日時：平成8年9月14日（土）
　　10：30～14：30
場所：ふれあいセンターいずみ建設現場
内容：ふれあいセンターいずみの棟上げを記念して、
　　過疎地域の農林業の方向性、自然や施設の活用などをテーマに討論。

◆講演「交流を通した村づくり」
　講師：　斎藤　章一　国土庁審議官
◆パネルディスカッション
　テーマ「泉村の価値を語る」

PROGRAM

海と山を結ぶ物産展示即売会

日時：平成8年9月14日（土）
　　9：00～15：00
場所：ふれあいセンターいずみ建設現場
内容：泉村の山の幸、泉村の友好町村である大矢野町の海の幸の展示、即売、観光案内　等

初秋の平家伝説の里めぐりツアー

日程：平成8年9月14日（土）～15日（日）
内容：ふれあいセンターいずみの設計者・武田光史氏、
　　久連子古代の里の設計者・内田文雄氏とともに、
　　五家荘一帯の雄大な自然や観光施設を見学するミニツアー。

SYMPOSIUM

棟上げ シンポジウム

泉むらづくり展

講演会

交流を通した村づくり

国土庁審議官
斎藤 章一

パネルディスカッション

泉村の価値を語る

コーディネーター
清水 義次

◆

パネラー
清水 弘・武田 光史・内田 文雄

SYMPOSIUM

泉むらづくり展
棟上げシンポジウム

9月14日 講演

食の観点から21世紀のむらづくりを考える

交流を通した村づくり

国土庁・審議官 斎藤 章一氏

人口爆発が時代の変化の大きな要因となる

現在、国土庁で仕事をしておりますが、入省しましたのは農林水産省で、20数年間仕事をしてきました。これからのむらづくりの一つのポイントとして、「農村と都市との交流」がありますが、私は、これがこれからますます頻繁になるだろうと考えております。こういうことを基盤に、新たな村づくりの可能性が開けていくのではないかと思っておりまして、そういう観点からお話をしていきたいと思います。

これから21世紀を迎える上で、中、長期的な社会情勢、広く社会

プロフィル
昭和19年、埼玉県生まれ。
東京大学法学部を卒業後、農水省に入省。
56年、臨時行政調査会事務局調査員。
58年、栃木県へ出向。
61年から農水省職員流通物価対策室室長。
平成6年から現職。

がどう変わっていくかというところを先ず考えていかなければと思っております。まず、21世紀に向かって大きく変わっていくことの要因の一つに人口爆発があります。1万年前に人口は500万人ぐらいだったと言われています。紀元2000年前が約2億人。江戸時代の始まりごろがちょうど5億人。明治に入るちょっと前ごろが10億人。昭和になって20億人。こういうようなテンポできておりまして、今の人口は58億人台に乗ったわけですね。そして、21世紀には60億人台に乗るだろうと言われています。そこで20世紀はどういう時代だったかと振り返ってみますと、実に50億人が増えた時代だったわけです。さらに、毎年9000万人の速さで増えていて、単純計算すると、21世紀の中頃には100億人の大台に乗ると見られています。ですから、世界は、いかに100億人を養っていくかという共通の課題を抱えているわけです。この重みに地球が耐えられるかどうかが大きな話題になっております。

食料はどうやって供給しているのか。環境問題はどうなるのか。いろんなことが言われている、その大本に人口がやがて100億人の大台に乗るであろうという問題があり、その中に私たちは置かれているのです。

戦後からの社会経済情勢がどうなってきたかと言うことも振り返ってみる必要があろうかと思います。皆さん、ご承知のように日本が高度成長を始めたのが昭和30年代です。本格的には始動したのは35年ぐらいだと、私は思っているわけですが、その時々に牽引車となる産業が日本の産業全体を引っ張っていってました。まず、繊維産業、さらに鉄鋼業、さらに自動車産業、さらに電気産業と。時代時代の牽引車となる産業が全体を引っ張ってきたんです。産業が発展する中で、身の回りではいろいろなものが出現してきて豊かになってきました。かつて、"3種の神器"ということが言われていましたね。テレビ、洗濯機、冷蔵庫。さらに、カラーテレビになり、クーラー、自動車に代わり、"新3C"とか言われていますが、このように私たちの生活が、利便性、快適性といって、生活水準が徐々に高まっていきました。

そういう時代の変化の中で、私は昭和58年～61年にわたって、栃木県庁に出向して地方での仕事を経験しました。企画部で「栃木新時代創造計画」という県の総合計画を担当をしておりました。そこで、これから日本の産業構造がどう変化していくかが議論されました。その時、産業構造は今までの「重厚長大」なものから「軽薄短小」なものに移り変わっていくだろうという議論がされたのを思い出します。重いもの、厚いもの、長いもの、大きいものを作る産業から、軽いもの、薄いもの、短いもの、小さいものを作る産業へ変化していくだろうと言われました。その中で未来産業と言われたのが、一つはエレクトロニクス。そして、もう一つがバイオテクノロジー、もう一つが新素材でした。こういう産業が日本の産業を引っ張っていくだろうと言われていました。さらに、その時、情報化時代ということも言われ、精神的には、物の豊かさから、心の豊かさへと移行するだろうと言われていました。また、その後の産業構造の流れを見ると、ニューハードと言われる機器が登場してきました。OA機器とか、パソコン、ファクシミリ、ビデオ、スイッチ制御をする工作機械というものが登場し、それが、最近はマルチメディア、インターネットとなってきました。戦後の経済の発展を振り返ってみますと、おおむねこういう状況になっているのではないかと思います。私たちの生活は、そういう産業が生み出す様々な製品によって生活が向上してきたわけです。

今、インターネットでは日本のどこにいても、居ながらにして世界の情報が手に入る、そういう時代になってきています。

オンラインとオフラインと両方の利点を合わせ持つ泉村

こういう中、長期的な人口爆発とか、それがもたらす食料の問題、環境問題などの21世紀へ向けての変化、あるいは、戦後50年の産業発展の流れ、その延長線上に、これからのむらづくりはあると考えてください。インターネット、マルチメディアの世界では、基本的にはコンピュータが繋がれていろんな情報が提供される。しかも情報を処理する能力も拡大され、映像情報が世界中に飛び交う時代になってきました。しかしこれは、オンラインという1つの情報システムです。情報時代において、考えなくてならないのは、もうひとつオフラインというのがあるということです。例えば、遠隔地間でテレビ会議ができますが、しかし、それだけでは時には意思疎通のできない部分もあったりします。それなら泉村か東京で直接会って一緒に酒を汲み交わし意気投合することによって、さらに会議が進展するということもあるわけです。これはオンラインではありません。オフラインなんです。例えば、このインターネットで東京にいながらにして、素晴らしい自然があるということを情報としては知ることができます。けれど、じかに体験するには、やっぱり直接ここに来なければ体験できませんね。土とか水とか地域の文化、地域社会との触れ合いとかはオンラインには乗りませんね。これはオフラインの世界なんです。土、水、緑、建物などは移動出来ない資源です。この移動できない資源が実はこれから注目されるだろうと思われます。経済や科学技術が発展しました。身の回りが大変豊かになりました。しかし、命だけは人工的につくれませんよね。しかも、これから先も人工的には作れるという見通しもないですね。私たちは、自然の恵みでしか食物を享受できないのです。これは21世紀になってもそうです。

食の問題、自然の恵み、食べ物は命そのものです。緑も土も水も命そのもので、人工的に作れないし移動できない。泉村に来て泉村の自然に触れる以外、その利益を享受することができない。ここで、私は地方に新たな発展の可能性が出てくると見ているのです。と申しますのは、オンラインで、泉村に居ながらにして世界中のあらゆる情報が入ってくる、そして泉村が持っている自然はここに居て享受できるというわけです。泉村は、オンラインとオフラインの両方の良さを享受できるというわけです。そういう時代に入ってきたと、私は思います。

しかも、これから“都市と農村との交流”はますますさかんになってくると思われます。情報化

時代が進んでくると、大都会にいてオンラインの方の情報は充分に手に入るけれども、大自然に触れるということはやはり農村に足を運ばないと味わうことはできない。そういう都市の欲求は、年々高まってきていると思います。私は埼玉県出身ですから、しょっちゅう東京から帰って、小さな“都市と農村との交流”を図っているわけですが、そのような体験からしても、都市と農村の交流は、これから大きな流れになってくるであろうと思われます。

ただ、“都市と農村との交流”の内容は変化してくるのではないかと思っています。例えば、“都市と農村との交流”を、A×Bで考えてみてください。Aは観光客の数、Bは滞在日数です。今までの都市と農村との交流はどうだったかというと、観光客数が伸びた時代ではあるが、滞在日数で見ると、大概日帰りか1泊2日。恐らく“都市の農村のと交流”は、都市の良さ、農村の良さ、山村の良さを合わせて考えて生活設計すると思われますし、そういう願いも募ってくるであろうと思われます。すると、Bがますます増えるであろうと思われます。泉村にじっくり寝泊まりしてじっくり自然を味わい、地元の人々と触れ合い、そして地域の食文化を楽しむ。こういう思いが出てくるはずなんです。ヨーロッパではグリーンツーリズムという形態が歴史的に発展してきていますね。これからそういう時代。A×BのB、滞在日数が1週間とか2週間、1カ月と増えるだろうと思われます。

それから、Aが増えていった時におけるむらづくりの在り方と、Bが増える時のむらづくりの在り方は違ってくるだろうと思います。重点の置き方、気配りの仕方を変えていかなくてはなりません。都市と農村の交流が滞在型になったときに、何がポイントになるかといいますと、私は食だと思うんです。1泊2日だと食べるのがだいたい1食か2食。じっくり食べるのは1食でしょう。それが1週間だと21食食べるわけです。地域の特産物が日替わりでいろんな組み合わせで出てくるとなると、食が都市の人を引きつける魅力になってくるでしょう。これから、食というのが、新しい都市と農村の交流では非常に重要な意義を持ってくるのではないかと考えています。

食は1億2千万人、すべての人間の共通項です。この食の原点は農ですね。その原点は土です。食の問題はその原点に帰って考えていく必要がある。食の問題がどういう変化を遂げていくのでしょうか。この食の問題は相撲に例えれば土俵、ドラマに例えれば舞台なんですね。これが変わってきている、これを見つめていかなくてはと思っています。地域の在り方も一緒に考えなくてはなりません。

食と体との関係から、食と心との関係へ

厚生省の国民栄養調査とか農林省の食料自給表などを見てみますと、一般に1970年代に日本人の胃袋が満たされたと考えられます。摂取量というのがだいたい1970年には横バイになってきている。食というのは、物理的には胃袋の量という限界を持っています。その胃袋の限界が1970年代に分かってきたとも言えます。1980年代になると、食料の量を拡大するのが難しくなってきます。では、食の文化がどこに向かったかと言いますと、そのころ、品質のいい物は高く売れる、鮮度のいい物は高く売れるという発見があり、質を高める方向に向かったんですね。そういうわけでたくさんの食品が生産されてきました。1980年代というのは食品のアイテムが増えた時代なんです。

ところが、食は、質をよくする鮮度をよくするだけでは消費者に満足してもらえないと分かったのは1980年代なんです。平成元年の家計調査では、全体の食料消費が横バイである中で1項目だけ高度成長を遂げているものがあったんです。具体的に言うと、おにぎり、弁当、惣菜だけが10％という高度成長をしてたんです。食のサービス化と言うことが起こりました。所得が増えて、その中で可処分所得が増えてきます。それが食品の場合、質とサービスの方へ消費者の意識が向き始めたのです。さらに、だんだん分かったきたのは、消費者と消費の接点が話題になりました。食品というのは消費者のどういう満足を与えるのか感動を与えるのか話題になってきたわけです。楽しさ、エンターテイメントの主役は食であることがしばしばでした。食は命を支えるという基本的な役割があるわけですが、もう一つ、食は私たちに楽しさを与えるということが明らかになってきました。食は質、サービス、エンターテイメントに向かい始めたんですね。これが1980年から1990年代の食の世界の一つの大きなフロンティアであるという事情が出てきました。

食が不足していた時代は、食と体との関係。さらに端的に言えば胃袋との関係でした。それが、今言ったような流れの中で食と心との関係になってきたというわけです。そういう局面になってきたんです。それが先程言った、土俵と舞台です。そこら辺がむらづくりの大きなポイントになってきたのではないかと思うのです。

今、あちらこちらで食を主役にしたテーマパークができて成功してきています。食が人々に楽しみを与える。心の触れ合いを。土曜日に手巻き寿司をやろうということになれば家族団欒、家族の触れ合いが高まる。さらに郷土料理を

囲んで会議の集まりをすると、地域の触れ合いが高まるというふうに、食が持っている新たな可能性がいろんな角度で出てきた時代だと思います。ですからこれをどうやって大きく育てていくかが、むらづくりの大きなポイントであると思われます。

食の付加価値は“3風”で決まる

こういう風に食がだんだん食と心の関係になりました。そうすると、そこにいかに付加価値をつけていくかが課題となります。と言いますのも、私たちが1食で食べる量はだいたい700gなんですが、この700gは、お金に換算すれば、300円から3万円の世界まであるんですよ。素材で考えると、例えば、大根1本が300円から3万円というように大きな幅はないんですが、食というのは、組み合わせて完成された時に、評価されて、喜んで3万円を出す場面ができるということですね。それは一体何なのか。食は文化ですから、地域性があり、色々な評価があります。日本人はどういう評価をして、何に感動して100点をつけるのか？　付加価値は何なのでしょうか。付加価値をつける基準が“3風”なんですね。3つの風、風土、風景、風味です。この3つの条件を満たすと食べる人の評価がぐんと上がって、感動が起こって3万円に限り無く近づく

というわけです。

風土というのは、東洋の考え方で「医食同源」というのがありますが、これは地域のものを食べているのが、健康に良いという考え方です。「日本の食生活全集」を見ると、地域地域はそれぞれ風土に合った特産物を大事に育て、それを食生活にして地域の食文化をつくってきたことが分かります。その共通項として“3風”があるわけです。

それと日本の食文化の特徴は風景なんですね。日本人というのは色彩にこだわりがありまして、食べる前に目で見て楽しみ、それから味わうといったことをします。風景がとても重要なんですね。日本人はこの風景をどのようにつくっているかと言いますと、風景を5色で作っているんですね。赤、青、黄色、黒、白で作った料理を非常に高く評価しているですよ。例えば、懐石でも寿司でもすべて5色を大事にしているのが分かります。なぜ寿司に卵焼きが入っているのでしょうか。黄色い魚というのは少ない。卵焼きの黄色が揃うと全体にバランスがよくなるんです。日本人が風景にこだわったのは、おそらく日本が豊かな自然を持っていたからでしょう。春夏秋冬、季節のおりおり美しく変身していく自然との長年の付き合いの中で日本人の感性がみがかれて、そういうこだわりが出てきたのだと思います。実はこの5色は、人間の健康の問題と絡んでいるんです。東洋の考え方で言うと、赤は心臓、白は肺臓、黄色は脾臓、青は肝臓、黒は腎臓。ですからパッと見て、5色のものが揃っていれば、5臓にいいんだなとサイエンスもクリアしてるんだそうです。特に、こだわりがあるのが紅白です。日本人は赤と白をとても大事にしてきたと言えますね。中でも、赤い食べ物はとくに高く評価しますよね。価格が高いんです。高価格帯の代表として、牛肉の霜ふり、マグロのトロ。普通の蛋白質はマイナス20度のコールドチェーンシステムの中で流通しますが、マグロの場合は、あの鮮やかな赤いマグロを提供するために、別途マイナス60度の長期保存で流通しているんです。それほど赤い食品を重用しているんですね。エビも頭やシッポをわざとつけて赤い色を演出してるんですね。これは自然に日本人の食文化として根付いているんですね。マグロの刺身には、白い大根のつまがつきもの。スモークサーモンには玉ネギといった具合に、紅白に演出していることが多いんです。特にごちそうと言う場合は、紅白が揃わないとおめでたくないというこだわりさえあるようですね。正月料理なども真っ赤。きっと、いろんな経験を積んで（歴史的に）こだわりが出来てきたのだと思います。

さらに、風味にもこだわりがあります。ふつう辛いとか甘いとか単味で考えていきますけれど、日本人の食に対するこだわりは“うまみ”ですね。みそとかしょうゆのエッセンスになっているアミノ酸です。これはいくつかの味が組み合わさって、そこはかとない味を演出していると思うんですが、具体的には“うまみ”となって現れてくるんです。さらに風味には5味という考え方があります。これは東洋の考え方ですが、日本版5味というのもあります。「春苦」フキノトウなど春に採れるのは苦みがあるということです。「夏酸」、「秋滋」深い味わいのもの、「冬甘」冬には甘いものが採れる。それに「茶渋」。それぞれのこころは季節感あふれたものです。いかに日本人が旬の味を大切してきたかが分かります。食文化の背後には、豊かな自然があるんです。磨きあげてきた食文化があるんです。3風、つまり風土、風景、風味があるんです。

食をキーワードに都市との交流を

食の原点は農、そして、農の原点は土です。土というのは歴史的に作られたものです。46億年前に地球が誕生して、35億年の原始の海の中で生命が誕生して、さらに藻類に発展し、藻類はやがて光合成をし酸素を吐き出し、それが積もり積もってオゾン層を作る。それまで紫外線が強くて生物は生きられなかった。やがて生命が上陸し、その死骸の蓄積により土ができました。岩石が風化したもの以上のもの。それは命でしょう。土は命が積み重なったものだから。土に生えた植物を、動物が食べて土に還り、という繰り返しでリサイクルで命の原点になった。いろんな植物を土は作ってきましたが、これさえ食べれば人間の体をすべて賄えるという作物は出てきていません。料理で言えば素材は土から出来てくる。それらの素材で構成されるので、組み合わせて料理していくことになります。素材と言う縦糸に、横糸を組み合わせて料理が出来上がっていくことになります。繊維でいう織物で作ったファッションは、食で言うと、感動、心の満足ということになります。これからはこの心の満足、感動が消費者の満足になっていくと思われます。これが食文化になります。食べ物だけで食文化が成り立っているのではなく、木の文化が箸となり、テーブルとなる。あるいは陶磁器文化が食器となる。地場産業が食文化と繋がっているんです。さらには、空間も食文化には必要になります。空間は豊かな自然においては最高の効果を表すでしょう。食は単に体をつくるだけのものから、日常生活を豊かにする、家族の触れ合いを高めるものとして、地域の触れ合いを高めるものとして高い評価をされつつあります。山村、農村ではそういう受け皿をつくらなくてはいけない時期にきていると思います。ニューマルチメディア、インターネットで、居ながらにして地方でもいろいろな情報を得られる時代にきています。そして、自然も生かすという、両方を生かす時代になってきているのです。その情勢は厳しいの一言につきるくらい厳しいわけですが、見方を変えれば、新しい可能性も開けるのではないでしょうか。泉村でもそういう新しい施設をつくって新しいむらづくりにチャレンジしてほしいと思っているわけです。しかし、何と言いましても厳しい情勢であるので、皆で一体となってこの施設を維持し、都会のファンを増やして、生き生きとしたむらづくりをして、大いなる発展をしていただきたいと思います。

むらづくりシンポジウム
パネルディスカッション

◆とき／平成8年9月14日
◆参加者／泉村村長 清水弘、『ふれあいセンターいずみ』設計者 武田光史、『久連子活性化センター古代の里』設計者 内田文雄
◆コーディネーター／アフタヌーンソサエティー代表取締役 清水義次

都会にない泉村の魅力を再発見
芽生えた意識は、
山の文化を創る力になる

都会にない泉村の価値とは？
村の自然や立地を生かす発想の転換や、村人一人ひとりの意識の改革など、
これからの発展につながるキーワードが寄せられた。
会場の参加者からも意見が飛び交い、村へ対するこれからの期待の高さがうかがえる内容となった。

まずは話し合うこと それが活性化への出発点だった

司会：ただいまから、午後のパネルディスカッションに入ります。テーマは「泉村の価値を語る」と題して語っていただきます。コーディネーターは、アフタヌーンソサエティー代表取締役の清水義次先生です。先生は昭和24年、山梨県に生まれ、昭和46年東京大学工学部を卒業されました。昭和48年、知性アイデアセンターに入社、昭和62年知性アイデアセンター常務取締役、平成3年にアフタヌーンソサエティーを設立され、代表取締役でいらっしゃいます。最近は、プロデューサーとしてご活躍され、専門分野は飲食店、物販店、街づくり、コミュニティーセンター等で、この"※ふれあいビジターセンター"のソフト開発を委託してます。それでは先生、どうぞ、お願いします。

清水（義）：ご紹介にあずかりました清水です。それでは、「泉村の価値を語る」というテーマを一緒に語っていただく方々をご紹介します。まず、左隣に座っているのが内田さんです。内田さんは泉村の久連子という五家荘の集落で、現在、"久連子活性化センター古代の里"を手掛けています。その隣に座っているのが武田さん。武田さんは"ふれあいビジターセンター"の設計者です。その隣は、村長の清水さんです。今日は、私たちが話をするより、むしろ皆さんから"ふれあいビジターセンター"を、これからどんな風にしたいか聞きたいのが本音です。あとで進んで話をしてください。それでは、内田さんから久連子の"古代の里"について話をお願いします。

※ふれあいビジターセンターは仮称、正式名は「ふれあいセンターいずみ」

内田：五家荘は熊本県内に住んでいても、行ったことがない人がかなりいると思います。私も最初は、人家が全く無い道を走っていくので、途中で非常に不安になった経験があります。でも、そういう不安を乗り越えて、是非皆さんに行ってもらいたいのです。五家荘は五つの集落からなっていますが、そのうち久連子へアプローチしていく道路は一本しかないんです。そこに村の活性化施設を、仮オープンさせてます。正式なオープンは平成9年4月20日ごろですが、紅葉の季節には、食堂など営業を始めてますので、よろしくお願いします。私は、実は20年くらい前に修士論文を書くのに、夏休みに一月ぐらいこの集落に4～5人で泊り込んで、聞取りの調査をしたのがたまたまの縁でした。それから18年後、ここの計画を手伝うことになったのです。ここは、かつて賑やかだった集落だったのに、どんどん子どもたちが村外に出てしまって戻って来ない。だから、50～60代のご夫婦で暮らしている家が大半なんです。最初、役場の企画の方と話をしたときに、何を作るかまだ決めてないという話でした。通常、公共施設の場合だと、こういうのを作ろうというのは、どこかで首長さんが決めるか、担

当の方が決めるわけです。この施設を造る背景には、どうやって集落を維持していくか、この施設ができて若い人が何人か帰って来てくれるように、また、そういう暮らしをもう一回作り直すにはどうしたらいいかをみんなで考える状況だったんです。これは大変恵まれたケースでした。最初の年に、村を活性化をしていくにはどうしたらいいのかをみんなで考えました。これはワークショップといわれ、参加型の計画作りですが、それを4年ぐらい前に始めたのです。子どもたちがいなくなった原因も、子どもたちは村外で教育を受けさせ、都会でいい会社に入ることが幸せだと思っていた時期がずうっとあったんです。気がついてみると自分たちが住んでいる村が素晴らしいことを、子どもたちに伝えてなかった。それと、やはり働くところがないなど、みんなで自分たちが住んでいるところをもう一回見直して、こんなにいいところがあるよということを議論して、そこに何を作るかを話し合いました。ここには、眠っている資源、それは物理的な資源だけではなくて、人的なつながりだったり、村から外に出ていった人のネットワークだったりとあるんですが、それをもう一回掘り起こそうと計画しました。久連子は、V字谷の僅かな平場に集落が張り付いている集落です。そこに、埋め立てをして3000㎡ぐらいの平場ができたんですね。まとまった広場ができるのは非常に画期的なことだったんです。そこでみんなで議論して、まず、久連子には久連子鶏という天然記念物に指定されている鶏がいるんです。その鶏を観光に来た人に見てもらう、にわとり小屋を造ろう。それと、鶏の羽を使って踊る「久連子古代踊り」の劇場を造ろう。もう一つは、シャクナゲや山から採れる植物を育てる温室を造ろう。さらに、いろいろな特産品や、久連子でしかない食べ物を食べていただく食堂と、それを加工して売る施設を造ろう。とはいっても、財政的なこともあり、補助金をその度申請しては、少しずつ造っていきました。一戸が2千万円とか1800万円とかいう工事費のものを四つ、二年がかりで工事をしています。計画を始めてから4年目に入り、今は資料室を造ろうとしています。これも専門の会社に頼むと小綺麗にはなるんですが、自分たちの気持ちというか魂がなかなか込められないんで、集落の人で造ろうと計画中です。この施設は、都会から来た人にふれあいというか、ホスピタリティーというか、ちゃんとみんなで案内する、心からもてなす、そんなことができる拠点にと思っています。今年は、吊り橋をかけたり外溝整備をしたり、来年の4月の立ち上がりに向けて、整備をしています。

Fumio Uchida

自然に対して力強く立ち向かい、人を引きつける建物を

清水：参加型の施設作りの例として、久連子の“古代の里”は非常に面白いかと思います。では、続いて、武田さんのほうから、“ふれあいビジターセンター”について、簡単に説明をお願いします。

武田：“ふれあいビジターセンター”の具体的な建物の説明をしようと思います。泉村は、村の面積の94％が山岳地とたぐいまれな集落です。面積は大きいけれど、平らなところがほとんど無い地域です。おそらく、ここは泉村開村以来、一番広い場所ではないかと思えるくらいです。また、泉村の入口に近いこともあり、表玄関的な意味を持ち、村に来た人をもてなす役割と、さらに村の福利厚生的な役割を併せ持っています。最初は、この自然のなかにどんな建物を造るかが難しいテーマでしたけど、この村の場合は、将来へ向けて力強く立ち上がるぞ、という意味合いを持たせるために、道路から見ますと崖の上空に水平の木造のストライプラインが入った印象的な建物が自然に立ち向かって現れるという形態を出したいと思いました。自然に力強く立ち向かっていくものを、木造の建築で表現できないかと考えました。泉村にとって林業は、今でも重要な産業の一つです。その林業のイメージ、村の杉のイメージを表現してほしいという希望もあり、二つの木造の建物を二つの方法で提案しました。ひとつは、非常に開放的な柱、梁の構成の建物、もうひとつは木の塊を削り出したような非常にマッシブで壁とか面を強調した建物になっております。まず、前者のL字型の建物は、敷地の外側に向いて、下のほうから見ると崖の上に建物がある造りになっています。このL字型の部分は、“ふれあいビジターセンター”で、お客さまをお迎えする部分になっています。形態的には、見通しのいい、どうぞいらっしゃってくださいという、オープンな造りになってます。内容は、観光インフォメーション、村の特産品、物産販売コーナーを予定しています。また泉村の情報を展示するコーナーもあり、例えば、新しい農作物がとれたとか、今回のヤマメのつかみ取り大会では誰々君が10匹取ったとか、道路情報や歴史的な情報、自然の情報、観光情報などいろんなものをミックスしています。また、泉村の産物のお茶を飲んだり、買ったりできるコーナーもあります。それから、今ガラスを張ってる部分はレストランになります。泉村の新鮮な材料を使って、村の料理を味わってもらう場所です。後ろの棟は、村の福利厚生施設です。この建物は、木の塊を削り出したというイメージで出来上がっています。内容は、村の会議室、全体の事務室、カラオケ等が二階にあり、おそらく泉村開村以来、初のエレベーターが一台付いています。もう一つ重要なのは、皆さんが今座っている部分は、コの字型で囲まれたイベント広場になります。この広場は5％のゆるい勾配がついていますが、身障者の方でも車いすで昇

り降りできる勾配に設定されています。なおかつ、イベントのときでも勾配を利用して、ステージと客席に使えないかと思っています。床は、板張りになります。木を貼りますと、広場にいて非常に優しい雰囲気になるし、例えばお子さんが直に座っても気持ちがいい部分になるのではないかと思ってます。最後にもう一つ、泉村のなかで私が一番美しいと思う人工の風景で、段々茶畑があります。昔は水田として使っていたといわれる小さな石を積み上げた段々茶畑は、農業をされる方達の歴史的な重みを全部あそこに表現されている気がします。自然のなかに人工物が入っているときの美しさでは一番見事な例と思います。そこで、なんとかこの建物で復元できないかと思い、L字型の建物の向こう側の擁壁を三段の、いわゆる段々畑状にしています。道の下から見ると、段々茶畑の上に浮かんでいる木造建築が全体のイメージです。もうひとつ、泉村は冬は寒いところなので、暖房をどうするかがありました。それで床暖房をL字型の建物に入れています。その床暖房はできるだけエネルギーを使わないように、OMソーラーという床に一旦太陽熱を入れて、その空気が床から部屋に入ってくるシステムを採用してます。

清水：どうもありがとうございました。それでは、こういう施設を作って、どんなことをしたいのかを、清水村長から話してもらいたいと思います。

村長：「平家落人伝説の里づくり」の構想から入っていき、それに基づいて村が作り上げてきたいろんな施設や、その活用や運用を見てもらえば、この施設の今後の運営が見えてくるのではと思います。これまで多くの観光客がこの村を訪れました。年々増加の一途をたどっていましたが、国道445号の崩壊によって昨年は約三分の二くらいしか観光客が来ませんでした。今まで25万人くらい来ていたのに、20万人に減ったことは、五家荘の方々の生活を脅かす大きな要因になりました。今年の10月、ようやく迂回路が完成しようとした矢先に、今度はまた五木村のほうで大きな国道が崩壊しました。これから先のことを考えたとき、445号だけに頼っている「平家伝説里づくり」では、少々危ないと感じました。それなら、この国道443号線を利用した観光客を、どうやって泉村に入っていただくか。併せて、隣町の中央町にある日本一の3333段の石段に訪れるお客さんをどうやって取り入れるか、そんな吸引力を持つ施設にするのが大きな狙いです。なにはともあれ、何人がこの施設を訪れると村全体的が潤うかは、はっきり言って未知数です。先日、後の建物の棟上げ式で挨拶をしたんですが、その時、私ははっきり申しました。今、こうやって大きな建物が目の前に出来つつあります。しかし、私の頭の中は空っぽです。なぜなら、その時にまだこの施設の運用・活用というのを、どうやっていいか分からない状態でした。それから、わずか1カ月半経って、この施設の運用として、443号線を基盤とした泉村の顔として活用していきたい。その方法として、あくまでも観光インフォメーション的な施設にしていきたい。ここを訪れたら、泉村のさらに上に行ってみたい、そういう施設にしたらどうかと考えています。さらに、村民のためには、福利厚生施設を建設しています。カラオケの部屋のほかに、木工品や陶芸など展示室もあり、これらは村の土産にと考えています。これから皆さんから、いろんなお知恵を借りながらですが、まだまだこれからです。今の時点ではそういう状況です。

県を越えて魅力ある地域になる可能性

清水：大変な決意をお持ちであることはよく伝わってきました。さて、それでは今回の本題に入りたいと思います。泉村にしかない、移動できない資源。しかもその中で、将来育てていけば可能性を持つのではというので、午前中は“食”を中心にした話でした。午後の部は、それを踏まえて、食べ物はもちろん、どんなことにこれから泉村の将来の価値を感じるか、遠慮なく話をしていただけますか。とくに、内田さんは八代のご出身、武田さんは宮崎のご出身で、泉村からそう遠くない。どちらでも、お願いします。

武田：泉村のどこに価値を感じるかというと、それは悪いことの裏返しになりかねませんが、その方が物事がはっきりするから、開き直って言います。まず、一番の魅力は、地の利です。これはいい加減に聞こえますが、例えば五ヶ瀬川。この辺りは、五家荘をはじめ照葉樹林文化地帯として、集落がまとまった1つの大きなエリアと思います。例えば、五ケ瀬、椎葉、五家荘は、熊本県でもあり宮崎県でもあり、場合によっては鹿児島県でもある。要するに、県を越えた一つの大きな文化地帯を昔から持っていたと思います。宮崎には変わった塔が建設されていたり、椎葉と五ケ瀬を結ぶ道路も出来つつあります。そうすれば、県を越えた魅力ある地域をつくれるという可能性が一番の魅力です。

清水：内田さん、いかがですか。

内田：久連子の話になりますけど、私は今までいろんなところでお手伝いをさせていただいたんですが、とにかく一番気持ち良く仕事ができているんです。これは、私にとってかけがえのないことなんです。何のために建物を設計するのか分からない仕事が結構多いんですが、少なくとも久連子に関しては、こういう施設でこれをやっていこうとか、皆さんで協議して決めて、施設を造っているわけです。建物が出来たあと、自分たちが運営していかなくてはいけないという、

Hiroshi Simizu

むらづくりシンポジウム

パネルディスカッション

テメエでテメエの責任をとるよ、という決意がきちっとある。非常に小さな集落ですから、意見の合意とか意思の疎通がやりやすい。小さな単位の集落が、逆に弊害だったでしょうが、でもこれから何かをやるとき武器になるだろうと思います。例えば都市の場合だと、隣に誰がいるのか分からないから、隣の人と意思の疎通を図るまでの努力がやたら時間がかかるわけですね。そこで疲れ果ててしまう。どんどん個人的な生活に変わって、集落や人の結びつきを必要としない流れがあったんです。少なくとも泉村の場合は、努力しなくてもある程度、解りあえる。一人ひとりの顔が見える暮らしが、泉村での目に見えない資源だと思います。ビジターセンターも、誰かよその人が造ってくれた、あるいは、県がお金を出して造ってくれたのではなく、これを自分たちがどう使うか、自分たちの施設という発想で考える必要があると思います。少なくとも久連子ではそれがスタートでした。樅木の方でもずいぶん前から「平家の里」という施設が出来て、観光客もどんどん来ているようですが、そんな動きがいろんな所で起きて、全体のとりまとめにこの施設が機能すればと思うんです。

“どうだ、まいったか”と都会の人に自慢できる発想へ

清水：私はこの施設から最も遠いところで生まれた人間です。山梨県の一番北の端っこの小淵沢という山の中でとれました山猿のようなものです。その人間から見たときに、泉村のどんな所に価値を感じるかというと、最初は、来て非常にびっくりしました。道路を走って五家荘のほうに行けば行くほど、これはもう帰ってこれないんじゃないかという不安感が、ひしひしと襲ってきて、このまま日が暮れたら間違いなく戻れないという不安を感じたのが最初でした。それから、いろんなところを這いずり回って歩くうちに、非常に素晴らしいものが沢山あるなと思いました。例えば、泉村から物凄く眺望がよくて、海が見える場所があるとは、とても想像していませんでした。今日お集まりの方で、泉村から海を見たことがある方、ちょっと手を挙げていただけますか。かなりいらっしゃいますね。この近くの矢山岳という展望台があるんですが、そこに行くと見事な海が見えます。あれを見ると、泉村は山に閉ざされた村ではないことを非常に強く思います。高い所に上がっていけば行くほど、ああ、気持ちのいい村だなあ、と思いました。それから、「ぽっくり寺」として有名な「釈迦院」があります。これも、こんな素晴らしいロケーションにお寺を造った人は凄いなあと、ただただ感激しました。名前が「金海山釈迦院」と名付けられており、おそらく標高約千mから眺める夕暮れというの

Yoshitsugu Simizu

は、素晴らしいものがあるんじゃないかなあと。昔の方々は、本当にいいものを見分ける物凄いセンスを持っていたんだなあと思いました。せっかく道路は通っているのですから、もう一息整備をされると、「金海山釈迦院」はさらによくなるでしょう。それから、道端で道路工事をしているときに車を横に止めたときに、ひょっと見ると赤い実をつけた小さな花のような実がありました。後ろから車で来た方に、「これは何ですか?」と聞いたら、「山人参だよ」と言うんです。根っこを引っ張って掘り出してくれて、朝鮮人参と同じような形の山人参なんです。「あんたは元気なさそうだから、後で飲むといいよ」と教えてくれました。本当に細かく泉村のいいところを探しますと、時間を全部使っていきってしまうのでこれ以上話しません。事実、この施設を運営する方を募集をしたところ、ちっちゃいお子さんを持っている方が、ご家族連れでここに住んで、さらに運営までやりたいという村外の方が沢山いました。これも非常にいいニュースじゃないかと思います。ちょっとコーディネーターの枠を超えまして、余計なことを言ってしまいました。さて、村長はこの施設をはじめ、建物が出来ている施設の運営や経営がこれからの一番重要な課題と言われました。内田さん、武田さん、経営的に見たとき、この村の施設や、村を繁盛させる素材として、どんな物をどんなやり方で発掘したらいいのか、その価値を知らせていくアイデアはございませんか。

武田：建築家は経営が苦手な人間ばかりでまずいんですが、宣伝はうまいんです。泉村の場合、これは一番売れるな、売り物になるなと思うのは、もちろん、観光です。それから、二つの水系、五家荘エリアと氷川水系エリアです。球磨川水系エリア、それから氷川水系エリアはお茶ですが、五家荘水系エリアは山茶とか、永年培っているキハダのような生薬があります。おそらく、二つの水系を結び付けるものとしてお茶、山茶、ハーブ茶、健康茶があると思います。お茶というテーマは、決して氷川水系のためあるわけではなく、村全体で健康なお茶のアピールをしていくことが売り物になると僕は考えます。

内田：私は、久連子で泊まってると、鹿の刺し身や猪料理など、いろんな珍しいものが出てきます。1軒ある旅館に、どういう方が泊まりに来るかと聞くと、季節によっては福寿草を見に来る客をはじめ、鳥や昆虫を見にくるようなんです。興味がない人にはそうでもないけど、興味がある人には物凄く豊かなものがある。でも、興味はあるけど知識がない人にとっては、どこにあるかなど情報がない。泉村には四季折々いろんなものがありますが、こういうものがある、今はここでこんなものが食べられるとか、教えてくれるところが絶対必要だと思います。例えば、植物に興味があって頻繁に山に入る人の知恵や知識をもう少し活用していけば、都会から来た人や、迷い込んだ人にも非常に面白いことが起きると思うんですよ。それをうまく発掘して、きちっとした形で村以外の人達に教えてあげることが、まず重要かと思います。そういう意味で見たら、何でも出来るんじゃないかなと思うんですけど。

清水：きのこ取り名人のおじいちゃんに会って、きのこの取り方を聞いたら、本当の場所までは教えてくれませんでしたが、取るプロセスは物凄く面白い話を教えてくれますね。猪を獲る鉄砲撃ちの名人の方に話を聞いても、これも物凄く面白くて、そういう「何々名人」がこの村は沢山いるんじゃないかと思いましたが、いかがでしょうか。

内田：今日は、久連子の方が何人かいらっしゃってますが、猪を獲る話を教えていただいて、獲れたばかりの肉を食べさせてもらうんです。でも、実はそういうことも集落の中で伝わっていかないという危機があるんですね。古代踊りですら、今日村長さんも少しおっしゃってましたけど、後継者の問題があって途絶えるんじゃないかという危機感もあるわけです。今までは集落の中でとこだわったけど、古代踊りを都会の人に教えてあげてもいいと思うし、村とか集落とか枠を少し取り払って、もっといろんな動きが出来るように逆に村の方から仕掛けていくことが大事だと思います。自分たちは都会で出来ることが村にいては出来ないと思うんじゃなくて、都会の人にどうだまいったかと、どんどん自慢していくような発想にしていくといろんなことが出来ると思います。

清水：なるほど。実は、赤い色をした「平家大根」という面白い野菜がありまして。東京のおそば屋さんは、辛味大根といって、これをざるそばにちょっと付けるだけで三百円高くなるものなんです。赤い色の平家大根はなかなか味もいい、姿もいい、色も赤い。今日の斉藤さんの話そのものですから、いいんじゃないかなと思います。それから、食べたことはないんですが、「ばばうっちゃげなし」。これは大きな梨で、落ちるとばばがうっちゃげたような形になるという面白い梨があるそうです。また、赤い色をしましたジャガイモ。これも商品化できるかなと。今日、午前中の話を聞いてたら、食べ物系のことばっかりが頭を占めてまして、コーディネーターとしては失格ですけど。このあたりで、今日、村からご参加されている方、あるいはわざわざ村の外から来られた方で、こんなことをしてみたらどうだ、または、泉村はこんなものがあるぞという意見を言いたい方はいませんか。

客席：泉村に来て半年になりますが、泉村はどこですか、とよく聞かれます。三千段の向こうですよというと、やっと分かってくれる。三千段の頂上は、村の麓から4km～4.5km、一時間で行くことができます。しかし、実際、三千段に登りましたら、殆どの方が中断して登りません。泉村から、おじいちゃんや、おばちゃんをマイクロバスで連れていくようにしたらどうでしょう。それから、もう一つ住んで思うのが泉村の夜です。見上げればV字に狭き夏の夜です。それに溢れるばかりの星屑があります。どこに行っても、自動販売機の光以外、光がないんですよ。おまけに、カジカやホタルなど夜の資源が沢山います。これを是非PRしてほしい。菊池カンガルーがいる「四季の里」は、新聞やテレビ、ラジオでスポットを流してますね。大々的にメディアを使って、ここのビジターセンターと釈迦院、それから勿論、樅木を紹介し。それをなんとかできないもんだろうかと思ってます。

清水：どうも、ありがとうございます。女性の方々で、我こそは、という方はいらっしゃいませんか。

武田：僕は泉村の魅力を三つくらい考えた中で、ひとつに泉村の女性があげられます。僕がこれまでお会いした方で、大体女性のほうが元気だった印象がありました。

清水：どなたか男性、女性問わず、ご意見のある方はいらっしゃいませんか。それでは、少し先に進めさせていただきます。

武田：泉村には、食べ物から自然から、いろんな魅力がある中で、とりあえず三つぐらい挙げようと思います。二番目に考えていたのは、泉村の標高差です。一つの村

Koji Takeda

の中に千mの標高差を持つ村は、かなり貴重な価値があると思います。まず標高差が一番現れるのは、季節ですね。僕の感じでは、泉村は北海道から鹿児島までの気候が全部あると思うんです。今年の冬一月に椎原の手前まで行ったんですが、あの時の樹氷はとても九州の、南国のイメージではありませんでした。おそらく信州にもあんな風景はないですね。夏場はもちろん秋の紅葉は天下一品です。そんな気候が、例えばどれぐらい農作物に変化をもたらしているのか。僕は専門家ではないので分かりませんが、要するに暖かい地方から寒い地方まで全部揃っていると変化に富んだ農作物も出来るんじゃなかろうかと、農業の素人はそんなことを魅力に感じて想像したりするんです。

自然と共存していく関係づくりを

清水：会場に、最近人気のアウトドアライフを楽しむ方は来ていませんか。残念ながら建築をやっている人間というのは、口ばっかりしゃべって酒飲んで終わりというのがほとんどで、なかなか体を動かさないんです。それで一緒に泉村を見てもらうために連れてきた人間の中に、椎名誠さんの「あやしい探検隊」という元気のいいグループがありまして、その事務局長のアウトドアオタクに来てもらって見せましたら、「ここだったら、何でも出来るよ」といって目を輝かせていた。どなたか、釣りでもいいし、キャンピングでもいいし、カヌーでもいいし、渓流を楽しんだり、山歩きを楽しんだり、そういう方は今日は会場にはいませんか。いらっしゃったらそういう方の意見を聞いてみたいんですが。実は、ここから少し中に入った五家荘の入口に、“自然塾”という昔の小学校を改造した自然のことをみんなで楽しむ施設があるんです。そこの方とお話したとき、実は驚いたことがあって、そこの施設からずうっと道をくねくねと行く途中に、非常になだらかなせせらぎがあるんです。我々の目から見ると、この場所は今ふうのアウトドアライフを楽しむ人達にとって恰好のポイントだなと思って、この場所はいいですよと言ったら、その周辺の方があんな湿ったところが本当にいいんですかと言われたんです。そうしたら、紅葉のシーズンに入るちょっと前だったんですが、そこの場所に三組ほどテントを張って寝泊まりしながらクッキングをしたり、水の中に子どもさんが入って遊んだりする人たちが出てきたんです。案外、外の人間が見たときと中の方が見たときでは、こういう差が一番大きいのかなと思ったんです。村長、永くお住まいの方としては、どんなところをこれから売っていきたいですか。

村長：お話のように、「エッ、こんな所に、こんな形でいろんなアウトドアやってるのかな」とまず最初気付きますね。しかしこれも自然のおかげと思います。実は、平成4年に本村で全国の登山大会があったんです。約400名ほど来られたんですけど、「九州にこれだけの自然が残っているんですか」というのが第一声でした。私たちは、あれだけ自然を切ってしまって本当にそうなのかなという感じしか持てなかったわけです。しかし、実際全国の山々を歩いている方々が話をされることだから、まず間違いないと感じました。今の話はそれを裏付ける大きな要素だと思います。人間、最終的には、自然に帰るわけですが、その自然をお互いに活かしながらやっていく、その中にそれぞれの道というのが開けてくると思います。自分だけは知っていると思いながら、本当はほとんど知らないのが現状で、このような会を持ちながら知らない方からいろんなお知恵をい

むらづくりシンポジウム

パネルディスカッション

ただくのも一考でしょう。また、まだ始めたばかりでよちよち歩きですけれども、「トークアンドディー」という女性の方からいろんなお話を聞いております。実はまた食の話に帰るんですが、泉村のいい食物をほったて小屋でいいから、三軒続けて造って営業したらどうかと提言したんです。一番最初に言われたのは、食べ物の材料はどこにあるのかと、これなんです。と言うのは、そういう材料が既にあるのは最初から分かってるんですが、自分たちで探す熱意まで来てないことを感じました。まだまだ泉村にいて泉村のことを本当に知ってないんだなと。実は「平家の里」が出来て三年目に泉中の三年生を連れていったんです。その時にいた約30名に、五家荘に今日来たのが初めてと言う人に手を挙げさせたら、五家荘の子供以外たった三名。27～28名は行ってないんです。ほとんどの方が泉村を知らないということです。お互いが村内のことを知らない一つの現れだと思うんです。改めて泉村とはどんなところなのか、どんな価値があるのかというのを見直すことを感じています。お互いにもっともっと泉村のことを知れば、話ももっともっと深まっていく感じを持ちながら聞かせていただきました。

清水：ありがとうございます。少しいい話ばかりが出ましたので、前向きにこの泉村の価値をさらに高めていく、あるいはそれぞれ今まで造られた施設を更にうまく使っていくことを前提に、ここだけは変えたほうがいい所について率直な意見を内田さん、武田さんお願いします。

武田：泉村のことを村外、村内の人にも知ってもらうために地図を作ったらと考えています。観光名所の地図はすでにお持ちですが、例えばどの辺にどういう虫がいるか、虫でみた虫地図とか、どういう食材があるとか、どこの豆腐の味噌漬はおいしいとか、どこの豆腐屋さんは朝10時までしかやってないとか、食材の地図、それから音の地図ですね。例えば、せんだん轟の滝は下の方からすごい音が聞こえるとか、沢の音がどの辺で良く聞こえるとか、梢を吹き抜けていく風の音はどの辺の場所が非常にいいとか、そういう地図もありますよね。それからこれは是非ご協力願いただきたいんですが、星の見どころや、弁当の食べ処、お茶の飲み処、ホタルの見どころ…。お茶もここで飲んでいただきたいですが、村の中でここの場所でお茶を飲むと最高に旨いとか。別に急ぐことではないので毎年一枚ずつ重ねていくと、10年間にはすごくいい地図がたまってくるんじゃないかと。そういうことを継続していきながら、村全体のことを村の人も知ったり、違う目で見ていくとこういう風に村って見えるんだというものを積み重ねていくといいなあと僕は考えております。

清水：大変いい意見だと思います。「泉村の自然」という素晴らしい本を読まれたことのある方ちょっと手を挙げていただけますか。このテキストブックの要素と、武田さんが言ったことに加えていくと、その本を読むだけで泉村の自然の良さが感じられる大変素晴らしいものです。泉村の自然を愛する五家荘の会の方を始めとする自然愛好家が、自分たちで小まめに歩いて書いたもので素晴らしい本だと思います。

内田：あまり、こういうところはまずいというのはないんですが、この前五木の方から久連子に入ろうとして、崖が崩れているというのを知らなくて、あと10分くらいで着くのにまた大通りまで戻って、一時間以上かけて行った経験があるんです。先程、地図を作る話があったんですが、必要最低限の情報がないんですよ。例えば、他の

集落でやっていることや、自分たちの村だけではなくて、都会や隣村から来る人と一緒に何かやっていくとき、それではちょっと困ると思うんですよね。例えば久連子で作っていることは、多分、他の集落の方はほとんどご存じないと思うし、古代踊りを普通の日でも見ることができるということが、他の集落にも分かれば、古代踊りを見たことがない人も行ってみようということにもなるでしょう。そういうために情報の整理が必要なんです。大げさなことではなく、人に伝えたいことを気楽にどこかに書いておけるとか、伝言板みたいなものでもいいんですが、手作りの情報交換を始めなければと思います。

客A：私は久連子から来ている者ですが、ちょっと宣伝させてください。明日「初秋の平家伝説の里めぐりツアー」で25名の方が来られて、久連子の方で食事をしていただけることになっているんですが、昨年一年間地元で採れる品物を使った料理をということで、熊本の料理研究家に来ていただいて作っています。三通りほど作る予定になっており、その内の一通りを明日は食べていただきます。また、五家荘の秋の紅葉はよく分かっているんですが、春の山桜やら新緑、これも非常にいいものですよ。

内田：今の話は、本来、私の方から説明しなければいけなかったんですが。それと平行して今、展示室というか資料室を作っているんですよ。それにいろんな生きた情報を集めたいと思っています。大体、資料というのは昔の話とか、昔使っていた道具も当然入ってくるんですが、それが今、自分たちの生活を確認することだったり、これから新しいことをやる上で重要にヒントになったりするんです。今の食事の件もそうですが、私も試食をさせていただいたんですが、非常においしいし、私は売れるんじゃないかなと思います。本当に全部久連子から採れるもので作ってますし、そういうのはいい試みだと思うし、応援したいと思っています。

清水：ありがとうございます。もう少し時間を残しておりますので…。

武田：苦言もやっぱり言っておかないといけないので。泉村の産業の大きな柱というのが、一つは観光だろうと思うんです。私がこれはいかんなと思うのは、例えば「せんだん轟の滝」でもいいんですが、アプローチの裏側とか壊れたものがそのまま放置してあったり、ゴミが道の横に落ちているとか、廃車になった車が道端に置いてあるとか、もう少し清潔感がないと観光の資格はないんじゃないかと思います。特にこれからは待っている観光ではなくて、作っていく観光を目指していかないといけないと私は思っていますので、清潔感を何としてでも作っていくという覚悟、決心がないといけないと思います。

客B：泉村は、氷川というきれいな川を持っておりますが、私はこの川が汚れていると感じております。それから、せっかくお茶の生産が増えているので、日本古来の茶道をこの場所を使って指導してもらうとかはどうでしょう。それから、茶花は泉村に一杯あります。四季いろいろ出てきます。茶花もここに来れば揃う、炭も揃う、全てが揃うというコーナーが出来たら、さぞみんな便利になるんじゃないかなと思っています。それと、泉村では県内ではいちばん小鳥の種類がいるんじゃないかと思います。そういうのも子どもたちに来てもらって春、夏バードウォッチングができる施設を作ると、他から泉村の方に集まってくし、宣伝にもなる。実際、宣伝不足ではないかと思います。

清水：どうもありがとうございま

す。武田さん、お茶の話は、今の方が言われたことはかなり実現されるんじゃないかと思います。泉茶は泉村の方はもちろん周辺の方も知っておられますが、残念ながらせっかくいいお茶を作りながら、なかなかそれを上手に売っていないのが、外から見た私どもの印象です。茶道が出来る場所として、むしろ後ろのコミュニティー棟の方に和室のかなり大きなものを作って、そこでお茶の勉強をしていただきたいと思ってます。それから、茶花も全くおっしゃるとおりで、これはここで売るものの一つにぜひ入れていった方がいいと考えてます。さらに炭についても、泉村はまだまだ炭焼きをされる方が残っておりますので、炭もお茶のコーナーに炭組という、岩のように炭を見立てて組んで展示販売する予定です。もちろん、一番大事なことは、泉村の村人の方々が茶を楽しんでいただくことだと思うんです。あと、水が大変おいしいので、泉の水でたてる泉の茶を、ぜひ売り物の一つにしていきたいと考えてます。

武田：補足しますと、ここはお茶を有料で飲んでいただく施設なんですね。日本人はお茶はタダだと思っている方が結構多いので、それを何とかおいしく飲んでもらうような出し方を提案していきたいと考えています。どうしても緑茶だけでは弱いことがあるので、球磨川水系の、例えばハーブ茶、たんぽぽ茶、柿の葉茶、健康茶、それから中国茶を導入しようと思います。中国茶が面白いのは、茶をたてる時のマナーが日本とは全然違って、非常に楽しいマナーで飲むというのがあります。見て面白いのがあるので、それも一緒にお茶の文化を味わっていただく場所になれたらと考えてます。

山の文化の発信地という誇り

村長：ずっと、みなさん方のご意見を聞きながら、ようやくこの施設の今後の活用というんでしょうか、総合観光案内の拠点としての一つの目安というか、見せていただいて、これからということを改

むらづくりシンポジウム

パネルディスカッション

めて感じました。ありがとうございました。

清水：この施設の入り口のところに、泉村の将来をテーマに小学生がかいた絵と作文があります。多分、皆さんご覧になったと思いますが、本当に素直に泉村の将来を考えたものが多くて、絵もきれいで色使いが良くて、都会の子の色使いと比べると泉村の方が鮮やかな感じがします。やっぱり豊かな自然があるのは、そういうことなのかなあ、なんて思いました。あの子たちが20年後帰ってきたときに、この施設が素晴らしいものとして発展するように、この場に集まった方々のお力を借りて頑張っていけば何とかなるのではと思います。今日は時間が短い中、本当は私はこんな気持ちを持っていたんだけど、という方がたくさんいらっしゃると思います。これからも道端で見かけたら、声をかけてください。積極的な提案を期待しております。本当に今日はわざわざ来てくださった方々、それから泉村の中でもこういうことに関心を持って集まってくださった方々、本当にありがとうございます。

武田：ひと言だけよろしいですか。付け加えると、これから山村について僕等が思うキーワードは、誇りと思うんですね。照葉樹林文化の、山の文化の担い手として、ここが山の文化の中心地、発信地だという誇りを持ってもらいたいと思います。

内田：このビジターセンターが建つ役場側、いわゆる氷川水系は泉村全体の中ではまだいいというふうに思っているんです。もっと、厳しい状況を抱えているのは、やっぱり五家荘地域だと思います。これから一時間かかる交通の便の悪さ、これは逆に今の話からいくといろんなものが残っていることにもなるんですけど、私としては、皆さんが自信を持っていただいて、自分たちのところにはこんなことがあると誇りにして、大事に育てていくことをやってほしいと思います。このビジターセンターと平家の里や古代の里など、いろんな施設がありますけど、一緒に考えていかないとと思うんです。もう一つはできるだけ宣伝をしていただく。我々で出来ることはこれからやっていこうと思いますし、とにかく久連子にはこんなのがあるよ、樅木にはこんなのがあるよということを、村外の人に知っていただかないと来てくれません。また、来ようと思った人にキチッとした応対をしていくことを村全体で考えてもらいたいと思います。我々は出来る限りそれぞれの持ち分で、応援をしていきたいと思います。是非よろしくお願いいたします。

清水：本当にお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございました。午前中のお話と併せまして、地域で採れたものを地域で消費していくという、“地産地消”ということがこれからこの施設を情報のセンターとして泉村の中の他の施設と連動してやっていくときの一つの大事な要素になるんじゃないかと思います。本当に長い時間、とりとめのない話にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

Kumamoto Artpolis'96

Zumi

泉村むらづくり展

ミニツアー「初秋の平家伝説の里めぐりツアー」

五家荘村内一円
五家荘平家の里他施設見学及び意見交換会
9月14日（土）～15日（日）

伝えていきたい泉村の宝
平家伝説と、大自然に育まれた
五家荘の暮らしに触れる

9月14日(土)～15日(日)、『棟上げシンポジウム』が終了した後、五家荘をめぐるミニツアーが行われた。秘境の名に相応しい五家荘の雄大な自然と、その中に息づく観光資源をバスで見学。『ふれあいセンターいずみ』設計者、武田光史さんと、『久連子古代の里』設計者、内田文雄さんも同行し、ツアーはより賑やかなものになった。夜は民宿で郷土料理を味わいながら、意見交換会も行われ、これからの村づくりに対するさまざまな意見が活発に飛び交った。

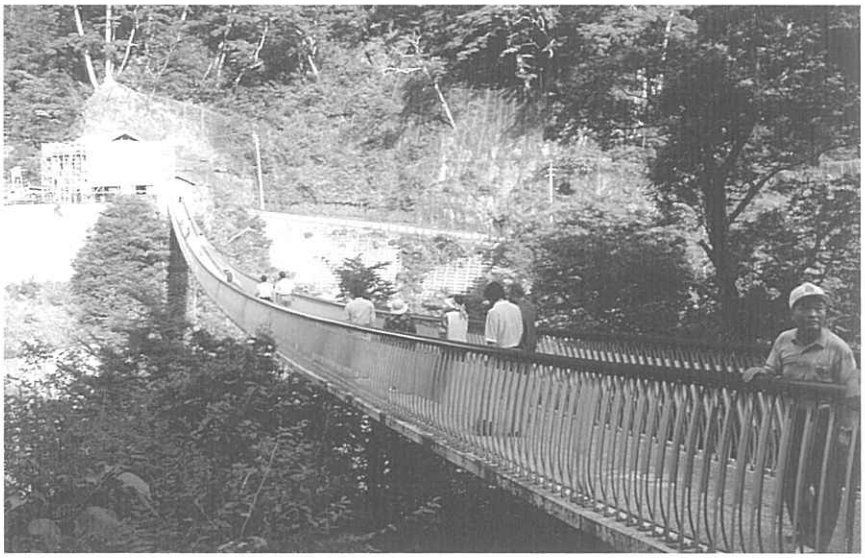
平家・落人伝説が眠る ふるさとを訪ねて

九州山地に抱かれ、手付かずの自然が数多く残されている五家荘。平家の落人伝説を秘めたこの山里には、その末裔が住んだ屋敷や、都をしのんで踊ったと言われる“久連子古代踊り”などが今も残っている。

今回、9月14日(土)～15日(日)の1泊2日で行われた「初秋の平家伝説の里めぐりツアー」は、そんな泉村の魅力を一人でも多くの人に知ってもらおうと開催されたもの。14日(土)、ふれあいセンターいずみで行われた『棟上げシンポジウム』終了後、あらかじめ応募していた18名の参加者が集合。メンバーの中には、設計関係者、アートポリスのモニターの姿も見られた。さらに、『ふれあいセンターいずみ』を設計した武田光史さんと、『久連子古代の里』を設計した内田文雄さんもツアーに同行。1台のバスに乗り込んで、ふれあいセンターいずみを出発した。

くねくねの山道を縫って、バスはどんどん山奥へと入り込む。車窓からは、どこを見渡しても緑深い山並みが続いている。

約1時間ほどバスで揺られ、まず参加者を出迎えてくれたのは、長さ116m、高さ55m、日本一の吊り橋といわれる『梅の木轟公



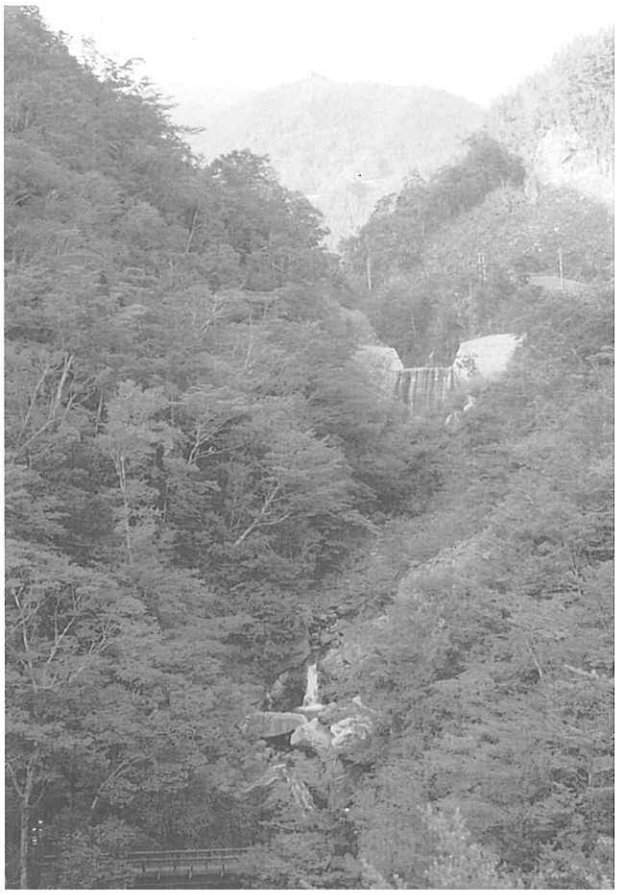
園』の吊り橋だ。この吊り橋は、床に1本のロープも使用されていない“PC吊床版橋”といわれる構造。その姿はまるで、山の谷間に一本の道が空中に浮かんでいるよう。最初はおっかなびっくり橋を進んでいた参加者も、意外に揺れないことが分かると安心の表情。でも、欄干越しに下を覗いては「うわ、恐ろしか」「バンジージャンプばしてみなっせ」と冗談の中にも、あまりの高さに驚きが隠せない様子だった。

ちなみに、梅の木轟とは、橋を渡った先にある滝の名前。菅原道真ゆかりの飛び梅伝説があるといわれている。

今回のツアーは、アートポリスに関連しているだけあって、参加者は建築物に興味津々。そのためか、橋の付近で改装工事を行っていた食堂の現場に集まって、構造状態の様子をうかがったり、意見を述べるといったひとコマも見られた。

バスはさらに山道を越えて、翌日の予定を繰り上げて『樅木の吊り橋』へと向かった。泉村には約20の吊り橋があるといわれ、中には生活道として、今だに活躍中の吊り橋もある。

この橋も、かつて集落の人たちの生活道として活躍していた歴史を持っている。この橋は長さ72m、高さ35mの「あやとり橋」と長さ59m、高さ17mの「しゃくなげ橋」の2つからなる親子橋で、木造の吊り橋だ。橋を渡りながら、足元に目をやると、木のすき間から川辺川の支流、樅木川の流れが見える。もちろん、人の歩く振動がそのまま橋にも伝わり、吊り橋ならではの揺れも充分。その様子を見てか、橋の途中で引き返す人、初めから渡らずに景色を楽しむ人、2つの橋を制覇して意気揚々に帰ってくる人と、それぞれに吊り橋を体験していた。



郷土料理をつつきながら、村づくりの話に花が咲く

2つの吊り橋を見学し終わるころ、日も傾きはじめた。9月とはいえど、山の日暮れは早い。早々に民宿『樅木山荘』へと向かった。

この宿では、夕食を食べながら、懇親会も開催された。ヤマメ料理や鹿の刺し身など、泉村ならではの山の幸がテーブルにずらりと並ぶ。素朴ながらも、初めて口にする山の珍味を存分に堪能し、町では味わえない粋なもてなしに満足している様子。宴もたけなわになり、アートポリス実行委員会の音頭を合図に、それぞれ自己紹介が始まった。

アートポリスモニターとして参加した山田和子さんは「いろんなものを見て回るのが好きなので、主人をおいて参加しました」という好奇心旺盛な主婦。アートポリスのモニターになったことをきっかけに、熊本各地のアートポリスを個人で見て回っている。今回、ツアーに参加したのも、『ふれあいセンターいずみ』を見るのが目的だったとか。『東陽村石匠館』で、くまもとアートポリス推進賞を受賞した東陽村からは、役場の志水隆さんが参加。「地域の人が地域を愛するような、また、村に来た人が楽しんでもらえるような村づくりをしたい」と発言。同じく、『八代市立博物館未来の森ミュージアム』や、『八代広域行政事務組合消防本部庁舎』など、町にアートポリスがあふれる八代市から参加した宮村朋彦さんが「風は南からといいます。アートポリスを熊本から東京へ、さらに全国へ発信しましょう」と続けた。

『ふれあいセンターいずみ』を設計した武田さんは、博多生まれの宮崎育ち。武田さんの中で、熊本と宮崎は九州の中で距離的に一番遠いイメージがあったという。「熊本では仕事の経験がないのにも関わらず、私のような建築家に建物を任せてくれたことに感謝しています」とアートポリスに参加できたことをうれしそうに語った。

また、翌日見学する『久連子古代の里』を設計した内田さんは、「久連子という地域がこれからどんな風にステップアップしていくか。たった25戸の集落だからできるパワーをみてほしい」と力強く語る様子に、参加者も明日の見学への期待が高まった。

最近の建物について、（株）太宏設計の松村一幸さんが「有名な建築物はえらい先生が造っているから、建築だけしか注目していない。建物がどの程度、住民に浸透しているかは疑問」と問題を投げ掛けた。「『ふれあいセンターいずみ』を地元の人たちがこれからどう活用していくかで、村が活性化していくんでしょうね。このセンターを目当てに、外からも人がどんどん集まってくる。多くの人に泉村を体験させたい」

それを受けて、（有）松井郁夫建築設計事務所の松井郁夫さんが、これからの建物づくりの参考にと“ワークショップ方式”を説明。「東京では、建物をつくる際、伝統的な工法にこだわっていたところがある。でも、これからは住んでいる人のことや、その建物を使う人のこと、土地に根付く習慣などを考えることが先決。さらに、その建物にはどの方角から風が吹くのか、建物を造った後に残った木は切るのかなど、こと細かく地元の人たちに聞いて、それをもとに初めて図面を起こす。そこまで考えなければいけない」と地域や住民との話し合いの大切さを強調。最終的に図面を決定する時も、利害関係が入らないように、一斉に好きな図面を指名する“旗揚げ投票”で行うというワークショップのやり方を紹介。あくまで使う人のことを考えた住民参加型の手法だ。「地元の人がどう感じて、どう使っていくかが大事。建物は名脇役でありたい」と言葉を結んだ。

職業や年齢を越えて、これからの泉村のこと、アートポリスのこと、暮らしと建物のことなど、郷土料理をつつきながら、話は尽きない様子。宴会は夜遅くまで続いた。

いよいよ秘境・五家荘の奥深くへ

翌日、民宿を出発して、いよいよ五家荘の奥深くへ。五家荘とは、仁田尾、樅木、久連子、椎原、葉木の5つの集落の総称で、文治元年（1185年）3月、壇ノ浦の戦いで敗れた平家一門が逃げ延びて、この地に定住したという伝説が残っている。

平家落人伝説に基づいた『五家荘平家の里』は、平家にちなんだゆかりの品々の展示や、秋には能が舞われる能舞台、茅葺き屋根の民家風の食事どころ、鹿園などを盛り込んだ施設だ。朱塗りの柱に緑の屋根の雅やかな建物を巡り、参加者はしばし時代絵巻を楽しんでいた。

泉村には、まだ電気もなかった頃に建てられた屋敷が大切に保存されている。約200年前に復元された『緒方家』もそのひとつ。これは、平家の落人、左中将平清経が、四国、大分と移り住み、最後に肥後国白鳥山（泉村樅木）へ定住した時の住まい。姓を緒方と改めて、その後も子孫の緒方紀四郎盛行が椎原を支配したという。昔ながらの茅葺きの家屋だが、その当時としては珍しく、2階には隠し部屋もある。そんな変わった造りに参加者は目を見張っていた。

また、『左座家』は、菅原道真ゆかりの家として由緒ある屋敷。都を追われた道真の子どもたちが、藤原家から逃れるために落ちのびて住み着いたといわれる。もともとこの屋敷は、奥という場所にあったが、約150年前に現在の場所に移築されたものだ。「茅葺き屋根が、どれもきれいですね」と参加者がもらすと、「今でも誰かの家の屋根を葺き替える時は、集落のみんなで集まってするんです」と内田さん。いずれの屋敷も、泉村の暮らしや歴史を伝えるとともに、村民の温かさを伝える象徴として、存在しているのかもしれない。

秘境の名前にふさわしく、五家荘は自然の宝庫。そんな大自然のフィールドの中でアウトドアが楽しめる『五家荘渓流キャンプ場』と『五家荘自然塾』にも立ち寄った。

『五家荘渓流キャンプ場』には、敷地内に小川が走り、そのほとりに、それぞれバンガローや常設テントが設置されている。キャンプに使う道具類もすべて貸し出し可能だ。また、夏場には、小川でヤマメのつかみ取り大会も開催されている。

一方『五家荘自然塾』は、平成7年にオープンしたレジャー施設。薬草園や芝生の多目的広場、キャンプファイヤーの設備も完備。宿泊棟では、夏はバーベキュー、冬は地鶏鍋やシシ鍋などが用意される。

いずれの施設も、五家荘の濃密な自然がバックボーンにありながら、かつ、施設が充実しているのが特徴だ。手付かずの自然がいまだに多く残る泉村の良さを再発見していたようだ。

設計者の内田さんのナビゲートで、『ふれあいセンターいずみ』と並び、これからの泉村の活性化の拠点になる『久連子古代の里』を訪れた。久連子は、袋小路状の土地に25戸の集落が集まり、そのほとんどは50～60代の夫婦が暮らしている。内田さんは、この施設を造る前に、住民たちと何をつくるかを徹底的に議論したそうだ。

「都会から来た人たちをもてなせるようにしようと、集落の人たちと話し合ったんです。住民が参加してつくっていく施設にしたかった。」

3000平方メートルの広場には、久連子鶏の飼育場や、久連子古代踊りの劇場、特産加工販売所や食堂、久連子資料室、温室など4つの棟が建設中。平成9年4月のオープンを控え、工事は急ピッチに進んでいる。

アートポリスをきっかけにこれからの村づくりがはじまる

「『ふれあいセンターいずみ』が完成したら、友だちを連れてまた遊びにきたい。この建物は泉村の目玉になると思います」とアートポリスモニターの山田さん。村の“表玄関”として機能を果たすとともに、村に住民に活性をもたらすカンフル剤として活躍してくれるだろう。

泉村にしかない、かけがえのない資源を守っていきたい。また、一方で眠っている“宝”を掘り起こし、自分たちの村が素晴らしいことを伝えていかなければならない。今、泉村は、アートポリスをきっかけに、そんな気持ちであふれているようだ。村外から来た人たちをもてなす準備は、ハードもソフトも両方、確実に進んでいる。

海と山を結ぶ物産展示即売会

熊本国際建築展
「くまもとアートポリス'96」
「泉むらづくり展」
記念イベント

大矢野町も協賛
海と山の幸が、泉村に大集合

『泉むらづくり展』の記念イベントとして「海と山を結ぶ物産展示即売会」が行われた。友好町村の大矢野町も協賛して、合計9店が参加。それぞれのテントには、特産品のお茶や木工芸品、海産物が並び、訪れた人たちを楽しませていた。

氷川ダムの水を通じて、物産が集まった

『泉むらづくり展』のイベントを記念して、各種団体や専門店が参加した「海と山を結ぶ物産展示即売会」が行われた。

出店用のテントの周りでは、それぞれの物産を持ち寄った人たちで朝から大忙し。シンポジウム受付け開始時間の9時30分には準備も整い、それぞれのテントからは、世間話に花を咲かせる賑やかな笑い声が響いていた。泉村のテントには、シイタケなど山の幸をはじめ、冷涼な気候を利用して作ったお茶など大集合。農家の方からも、今朝とれ立ての野菜類が持ち寄られた。中には、村民が個人で作った手作りパンもあり、注目を集めていた。他にも、ヤマメの甘露煮や、ユズごしょうなどの加工品も並べられ、山里でしか味わえない味覚で埋め尽くされた。

特産物の中で、五家荘ならではといえば、とうふの味噌漬けだ。これは、平家の落人が保存食として作っていたといわれ、今でも泉村をはじめ、五家荘ではおなじみの郷土料理。2、3時間蒸して水分を取ったとうふに、自家製のモロミミソを漬けて1週間ねかせる。出来上がった味は、とうふというよりも、カマンベールチーズに似た口当たりで、辛党の人たちには酒のつまみとして好まれているそうだ。

また、来場者の足を止めていたのは、ヤマメ養殖業者が炭火で焼くヤマメの塩焼き。香ばしい匂いと、こんがり焼かれたヤマメの姿に、思わずのぞき込む人の姿が後を絶たなかった。

「大根1本でも、泉村で育ったものを提供したい」と泉村役場の西坂さん。豊かな山の恵みが育んだ泉村の産物を、多くの人に知ってほしいという気持ちも込められているようだ。

今回のイベントには泉村の友好町村である大矢野町も参加。両町村は、氷川ダムの水を使用しているという共通点から、昭和62年に友好町村を締結。それ以来、毎年、小学生がお互いの町村を訪問して交流キャンプを行ったり、10月中旬には共同で氷川ダムの清掃作業を行うなど、昔から盛んに交流が行なわれている。

大矢野町からは、ワカメやミリン干し、イワシの丸干しなど、海産物がずらり。山の幸に負けじと海の幸も充実した品揃えだった。

思わぬ海産物の販売に、来客者も大喜び。海、山、両方の物産を手にする姿も見られた。

大好評！婦人部会の山菜弁当

今回は泉村から、商工会婦人部、商工会青年部、農林物産出荷協議会、五家荘工芸、専門店など8店、大矢野町からは、大矢野町商工会の1店が参加した。新しい施設に

よって、村の活性化を期待する気持ちからか、出店者の積極的な参加があったという。

中でも、好評だったのが、商工会婦人部の手作り山菜弁当。山菜煮しめとおにぎり、自家製の漬物が盛り込まれ、250円と手頃な価格で提供された。

「せっかく、泉村に来たんだから、山菜をたくさん味わってほしいと思って」と商工会婦人部の橋本はる代さん。通常、商工会婦人部は30名のメンバーで活動しており、今回、弁当づくりには約10名が参加した。

メンバーは、前の晩から山菜煮しめの仕込みにかかり、当日も朝6時から役場の調理室で炊き出し。既製品を一切使わず、泉村でとれた食材を使って仕上げただけあり、300個ほど作った弁当は昼頃にはすべて完売。「買えなかったお客さんもいたから申し訳なかったですよ」と嬉しい悲鳴が上がっていたそうだ。

昼食時になると、棟上げシンポジウムのテントや、その周辺などでは弁当開きの姿が見られ、泉村のおふくろの味に舌つづみを打っていた。

「『ふれあいセンターいずみ』は、建物も中身も立派なものができて、もったいないくらい。立派すぎて、誰も使いこなせないのでは…という不安の声もありますが、そうならないように、どんどん利用していこうと思っています」と橋本さん。これからの活用法を検討中だ。

物産を頬張りながら伝統芸能を観賞

昼食時、『棟上げシンポジウム』のステージでは、郷土芸能の“葉木神楽”が披露された。これは、約300年前から、五家荘葉木地区に伝承されている神楽で、宮崎県の岩戸神楽の流れをくむもの。昔は33種類の舞いがあったが、現在は24種類の舞いが伝承され、毎年10月17日に葉木神社で奉納されている。今回はその中で“稲荷”と“監員”といわれる舞いを披露。黒い袴と長袖の白上衣を身に着けた舞い手がステージで踊り、会場は、笛や鈴、太鼓の荘厳な響きに包まれた。泉村の文化を知るアトラクションに、来客者も弁当を食べる手を止めて、郷土芸能に見入っていた。

『棟上げシンポジウム』に詰め掛けた来客者は、約360人。ほとんどの人が「海と山を結ぶ物産展示即売会」に足を向けて、泉村の特産物を見学したり購入していた。

特産物を舌で味わい、伝統芸能を実際に堪能することで、泉村を知るきっかけになったのではと、今回のイベントの効果に期待が寄せられてる。

KAP熊本国際建築展 「くまもとアートポリス'96」
「泉」むらづくり展

くまもとアートポリス'96
泉むらづくり展
KUMAMOTO ARTPOLIS'96 IZUMI VILLAGEPLANNING EXHIBITION

1997年3月発行

編集・発行　熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会
事務局：熊本県土木部建築課内
〒862-70　熊本市水前寺6丁目18-1　TEL 383-1111

企画・制作　株式会社熊日広告社、有限会社エアーズ
デザイン　株式会社フォリオ

印　刷　凸版印刷株式会社

○総合記録
○都市デザインサミット
○熊本まちづくり展
○山鹿まちづくり展
○阿蘇まちづくり展
○清和むらづくり展
●泉むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS '96